

CAMPUS 八戸学院

vol.56



今日はどのランチを選ぶ!?

子どもから高齢者まで世代をこえて交流できる
「地域の居場所」づくり

八戸学院第二しののめ幼稚園 ボールは友だち～サッカー教室～

美保野キャンパス人工芝グラウンドで八戸学院大学サッカー部のコーチと学生10名によるサッカー教室が開催されました。

最初はおとなしかった園児も学生のリードで積極的に動くようになり、秋晴れの下、ボールを追いかけて元気いっぱいグラウンドを駆け回りました。



初めは緊張気味でしたが楽しい指導に笑顔がこぼれます



お父さん・お母さんも一緒に参加

CONTENTS

- 3 ボールは友だち～サッカー教室～
- 4 今日はどのランチを選ぶ!?
- 8 子どもから高齢者まで世代をこえて交流できる「地域の居場所」づくり
- 10 ステラが行く／ステラ・フォーカス
- 12 八戸学院 TOPICS
- 14 八戸学院 NEWS 〈CLOSE UP!〉
- 15 同窓生の広場
- 16 イノベーションプログラム（基金）報告
- 18 これからの学校について
これからの本学院について



八戸ブックセンターで「私が選ぶ八戸学院図書館に置いてほしい本」をテーマにブックハンティングが行われました。八戸学院大学の学生7人が1人1万円の予算で興味はあっても手が届かずにいた本や、同世代に薦めたい本など40冊を選びました。選ばれた本は、同図書館に新着図書として所蔵され、学生が展示用のポップ作りにも挑戦します。

八学大生が「ブックハンティング」に挑戦

CAMPUS 八戸学院

vol.56



表紙

プロ野球ドラフト会議で大道温貴投手(左)が広島東洋カープ3位、中道佑哉投手(右)が福岡ソフトバンクホークス育成2位に指名されました。
大道温貴(ビジネス学部4年)
埼玉県出身、春日部共栄高校卒
中道佑哉(ビジネス学部4年)
十和田市出身、八戸学院野辺地西高校卒

建学の精神

「神を敬し、人を愛する」

カトリックの精神に則る道徳教育を施し、高尚なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することをもって目的とする。(寄附行為 第3条)

- 八戸学院大学
TEL 0178-25-2711
- 八戸学院大学短期大学部
TEL 0178-25-4411
- 八戸学院地域連携研究センター
TEL 0178-25-2789
- 八戸学院図書館
TEL 0178-30-1695
- 八戸学院光星高等学校
TEL 0178-33-4151
- 八戸学院光星高等学校専攻科
TEL 0178-25-6322
- 八戸学院野辺地西高等学校
TEL 0175-64-4166
- 八戸学院幼稚園
TEL 0178-34-5765
- 八戸学院聖アンナ幼稚園
TEL 0178-45-3670
- 八戸学院第二しののめ幼稚園
TEL 0178-25-2488

<https://kosei.hachinohe-u.ac.jp/>

八戸学院野辺地西高等学校

学生食堂

定食、カレーなどの定番メニューから、曜日限定メニューが楽しめる「井の日」、
「麺類の日」がユニークです。



八戸学院光星高等学校

学生食堂

学食一番人気の「唐玉丼」は、ご飯に細切りキャベツ、唐揚げ、温泉卵が
のって、好んでマヨネーズやたれをかけて食べます。また、ピックチキンや
大盛ミートソーススパゲティなど育ち盛りの高校生にはボリューム満点のメ
ニューも欠かせません。



幼稚園 (1～2歳児)

幼保連携型認定こども園の八戸学院幼稚園では、1～2歳児の給食を自園
調理しています。



お誕生会の手作りケーキは
園児たちが大喜び！
小麦アレルギーの子ども
にはフルーツケーキを。

3～5歳児の給食は、大学・光星高校の学食も手がけているベースボール
ハウスさんが調理。毎日幼稚園に届けられます。

幼稚園 (3～5歳児)



3幼稚園の給食を
大鍋で調理します。
「おいしくな～れ」

子どもから高齢者まで世代をこえて交流できる「地域の居場所」づくり

誰でも参加できる子ども食堂

2016年11月、ゼミナール活動の一環として子ども食堂を立ち上げました。

当時所属していた短期大学のゼミ生たちと八戸ポータルミュージアムはっち2階の食堂で、月に1度の開催です。開催までに、ゼミ生たちと全国各地の子ども食堂の活動状況や貧困についての情報収集をしながら準備を進めていきました。

その当時は全国に300ヶ所の子ども食堂があると知られていましたが、そのほとんどが大都市中心に開設されていたため、果して東北地方に子ども食堂があるのかどうか分からない状態でした。調査を進めていくうちに岩手県盛岡市に「インクルいわての子ども食堂」、宮城県仙台市にも「ドリム子ども食堂」など、すでに数か所の子ども食堂が運営されていると、東北で取組みをしていないのは青森県だけだったことを知り驚きました。そこで他県ではどのような形で展開しているのか実際に見てみたいと思い、ゼミ生たちと一緒に盛岡市へボランティア活動に出掛けました。また、私たちよりも少し早く2016年4月から弘前市内で活動を始めたい2ヶ所の子どもの食堂にも見学に行きました。ところが2ヶ所とも「貧困の子ども」、いわゆる生活困窮者や一人親世帯の子どもに限定した取組みをしていたために全く利用者がいないというのを知り、私たちの子ども食堂はどんなふうになったらいいのか、不安でいっぱいになったことを覚えていきます。ゼミの時間に何度も話し合い、最終的には「貧困」にとらわれず、欠食や孤食をしている子どもや大人たちを対象とした「食育」の観



八戸学院大学
健康医療学部 人間健康学科 准教授
佐藤 千恵子

東北女子短期大学生生活科 卒業
2007年に八戸短大ライフデザイン学科非常勤講師、08年に同学科准教授。18年に八戸学院大学健康医療学部人間健康学科准教授となり、19年から八戸学院大学短期大学部介護福祉学科の非常勤講師を兼ねる。管理栄養士、あおもり食育サポーター、食生活アドバイザー、フードコーディネーター。

研究テーマ 八戸市及び近郊の食生活の実態
「子ども食堂」への取組み
担当科目 食生活論、栄養指導論、健康教育論
キャリアデザインⅡ・Ⅲ、基礎演習
プレゼンテーション、研究演習
生活支援技術Ⅱ

点から、誰でも参加できる子ども食堂を立ち上げることにしました。



はっちでの子ども食堂

仮にその中に貧困の子が紛れていたとしても特別な意識を持たないで皆と同じように接する、つまり集まった人

たちが一緒に作って食べて、笑顔になれる「地域の居場所」をつくりたいと考えました。もちろん、「子ども食堂」「貧困」のイメージは八戸の人たちにもあったので、誰も来なかったらどうしようという不安もありましたが、そういう時は友達や知人に連絡して来てもらえばいいのではという気軽な気持ちで始めることにしました。要するに八戸にも子ども食堂があり、一人で食べるよりはみんなで一緒に食べた方がおいしくて楽しい場所であることを伝えたいと思ったのです。そうしてオープンした初日は本学の学生や普段食堂を利用している人たちばかりでしたが、翌月からは新聞報道の効果もあり、毎回20名前後の親子や仕事帰りの会社員、高校生たちが来てくれるようになりました。月に1度の開催でしたが、回を重ねるごとに食材の提供やボランティアの申し出もいただくようになり、さらには子ども食堂を立ち上げたいという人たちも登場し、市民の方々に繋いでいただけるようになりました。その結果、現在八戸市内には7ヶ所の子どもの食堂があります。そして、今はこの7ヶ所の子どもの食堂がそれぞれの地域で月に1度開催される時に、ゼミ生たちはボランティアとして参加しています。

新たなゼミナール活動

昨年からの新たなゼミナール活動として、低年齢層の親子対象の離乳食教室を開始しました。

子どもの虐待が大きな社会問題と



離乳食教室のようす

なっていますが、県内の調査結果では八戸市が最も虐待件数が多いという新聞記事を読み心が痛みました。私自身も3人の子どもの持つ母親であり子育ての大変さは知っているのですが、虐待をせざるを得ない状況に追い詰められている母親たちの手助けをしたいと思います。同時に学生たちにもこれまでと違い、乳幼児と接する機会を与えてあげたいと思ったのですが、乳幼児の接し方についての知識がないために短期大学部幼児保育学科准教授加藤康子ゼミのゼミ生にも協力していただきました。満5カ月〜18カ月の乳幼児と保護者10組を対象に離乳食の作り方や専門インストラクターによるベビーピクス、そしてゼミ生たちによる絵本の読み聞かせなどを実施し、参加者からは離乳食の作り方はもちろん、子育ての悩みやわからないことが直接質問でき



ベビーピクスのようす

て、ママ友もできる交流の場として喜ばれています。このように子ども食堂は様々な形で運営されているため、学生たちには戸惑いがあるようです。開催に合わせた事前勉強会に参加することもあり、これまで親や教員以外の大人と話す機会がなかったゼミ生にとってはとても緊張する場面だといえます。家族に高齢者がいないため、どう接していいかわからないというゼミ生もいます。けれど、月に1度のボランティア活動を重ねることで、次第に誰とでもコミュニケーションが取れるようになります。笑顔で会話ができ、どこへ行っても歓迎してもらえるので、自然に自分たちも相手の役に立ちたいという気持ちになり、そういうポジティブな姿勢が評価されて就職先が決まったゼミ生たちもいます。ゼミ担当教員としてはこんな

地域活性化に繋がるゼミナール活動

今や子ども食堂は全国に約4000ヶ所あるようです。皆無だった青森県内にも八戸での私たちの活動がきっかけとなり、青森、弘前、十和田へと広がってきています。が、まだまだ周知不足が課題であり、もっと拡充していかなくてはという思いでいたるところにコロナ感染症が発生したため、8割が休業中の状態です。再開の目途もたつていません。このままでは子ども食堂は忘れられてしまうのではという不安感に駆られています。そんな時にフードパントリー（食材の配布）を実施している首都圏の活動を知り、私たちがフードパントリーを始めました。また、高校生だけで子ども食堂を立ち上げたいという申し出もあり、フードパントリーの際にはボランティアとして参加してもらいました。暑期中、高校生たちのキラキラした眼差しと笑顔がとても新鮮でした。

これらを踏まえ、子ども食堂を介して子どもから高齢者まで世代をこえて交流できる「地域の居場所」づくりに努め、地域が活性化されるようにゼミナール活動を継続していきたいと考えています。



八戸学院聖アンナ幼稚園 「大切に」〜園生活で感じる平和の芽〜

未だ連日のようにコロナの話題が絶えず、除菌やマスクの着用、パーソナルスペースを意識した生活を強いられる中、聖アンナ幼稚園の園庭はいつもと変わらぬ実りの秋を迎えました。夏、ぶどうの実がまだ青いうちから「いつ食べられるかなあ？」と楽しみにしていた子どもたち。毎年この季節には3種類のぶどうを給食でいただき、ゼリーを作るなど何度も味わうことが子どもたちにとって恒例の楽しみとなっています。



ところが今年はぶどうがほとんどなくなってしまい、気付いた時には食べられそうなおぶどうが残り少なくなっていました。園庭で遊びながら少しなら味見しても良いことにしていたものの、一つ二つと食べるうちに、中には一房以上食べてしまう子も。それほどまでにとっても美味しいぶどうなのですが、それでは一部の子しか味わうことが出来ません。

そこで子どもたちを集めてお話をしました。ぶどうはこれからゼリーを作りたいので取らないで置いてほしいこと。一部の子が沢山食べてしまうと他の子が食べられなくなってしまうから、独り占めしないでみんなで分け合ってほしいこと。コロナが流行り始めた時に沢山のマスクを買った人がいたからマスクをすることも出来なくて困った人がいたことも併せて伝え、そのことをどう思うか子どもたちに問いかけてみると「それは

だめ！」という答えが返ってきました。その後、子どもたちはしっかりと約束を守りみんなでゼリーをいただくことが出来ました。



たかぶどう…それぐらい、いいではないか？そのような声もあるかもしれませんが。しかしながら子どもたちの中には既に平和を感じる心が芽吹いています。コロナ禍の制限された生活を余儀なくされた今、「平和」とは以前のように自由な生活を当たり前に過ごせることのある方がたさだと、子どもから大人まで多くの方が実感されているのではないのでしょうか。子どもたちが大きくなってから戦争や犯罪に関する悲惨さやマイナスイメージだけを押し付けられるよりも、幼い頃にたくさん小さな幸せを身近に感じてみんなで分け合うことの大切さを知ることのほうはずっと効果的な平和教育につながるのではないかと今回の出来事から教えられました。



自分を大切に、物（自然も）を大切に、そして命（みんな）を大切に！ということを意識しながら子どもたちと過ごしていきたいと思っています。

ステラ・フォーカス



八戸学院第二ののめ幼稚園

ゴーヤ

年中組では、春にテラスの花壇にゴーヤの苗を植え、雑草抜きや水やりをして毎日観察しました。苗がぐんぐん成長し、花が咲いて小さな実ができると「早く大きくなるかな〜」と期待を膨らませていきました。気温が高くなるにつれてゴーヤは大きくなり、八つも収穫。「どんな種？匂いは？味は？」とクラスでは疑問を抱きました。ドキドキしながらゴーヤを切ってみると、種の

色が違ったり、綿が入っていることに皆驚きました。自分たちで切り、綿や種を取って調理したのはゴーヤチャンプルーです。子どもたちにとって初めてのゴーヤは苦かったようですが、自分たちで大切に育てて食べられたことは、嬉しくとても良い経験になりました。



八戸学院幼稚園

「みんなの工夫で楽しもう！」

コロナ禍で、毎年恒例のお泊り会を中止せざるを得なくなりました。でも、ここで落ち込んではいられない！と年長担任と年長児がアイデアを出し合い、お楽しみ会を企画しました。園舎の中を縁日の屋台に見立て、おもちゃすくいをしたり、吹き上げ花火を見て花火大会気分を味わったりして夏の夕べを思い切り楽しみました。PTAの方々も、中止になった夕涼み会に代わるお楽しみを！とゲームとプレゼントを準備してくださり、そ

れを使って園児と保育者で夏祭りごっこを開催することができました。コロナ禍でも、みんなで工夫をしながら、園での楽しい活動を行っています。



八戸学院聖アンナ幼稚園

避難訓練〜いざ柏崎小学校へ！〜

今回の避難訓練は、大地震が起きた後、津波がくる設定で、向かいの柏崎小学校へ逃げる訓練をしました。「地震がきました！」の声にすぐ反応し、子どもたちは机の下に隠れます。そして、園長先生から「津波がきます。ホールへ行きましょう」の声を聞き、ホールへの移動。

人数確認をしてから、いざ柏崎小学校へ！大きい子は小さい子の手を取ります。途中転んでしまう子もいましたが、「大丈夫？」と優しく声を掛けながらいきました。小学校へつくと、大きな校舎に年少さ

んたちは「すごーい！」とため息！そして階段を登って三階へ。とても静かに行動できたので、校長先生から「上手に逃げて来られましたね」との話があり、子どもたちの顔もにっこりでした。

帰り道、年長児さんは「僕、小学生になったら柏崎小学校なんだ〜」「わたしもだ！」など、楽しそうに話をしながら幼稚園へ戻りました。



短大 被爆ピアノ平和コンサート [10/20]



短期大学の学生ホールで被爆ピアノを調律されている矢川光則さんを招き、被爆ピアノ平和コンサートが開かれました。原子爆弾によって街とともに一瞬にして消えたたくさんの命。その壊滅的な状況の中で奇跡的に焼け残ったピアノが目の前に。学生たちは被爆ピアノを用い、絵本の読み聞かせや手話、歌など様々なグループワークの発表を行いました。

専攻科 有機溶剤作業主任者技能講習会



本校の塗装実習の様子

有機溶剤作業主任者技能講習会（一般社団法人青森県労働基準協会主催）が11月5日・6日に東北町乙供の(株)青森原燃テクノロジーセンターで行われます。この講習を自動車科2学年の学生全員が受講します。有機溶剤作業主任者とは、有機溶剤を扱う現場で、従業員などの身体に危険が及ばないように指揮・監督する人のことです。

自動車整備の場合、一般整備の他に有機溶剤（シンナー等）を使用した塗装作業を行うことが多々あります。よってこの資格が絶対必要となるのでこの時期に受講し学生全員が資格取得できるようにしています。

野西高 オートメカニック系列の挑戦 ～今年全員合格！～

本校のオートメカニック系列は、1977(昭和52)年の自動車科開設以来、3級自動車整備士養成施設として数多くの卒業生を輩出してきました。「自動車整備のプロ」を育てるという大きな目標のもと日々研鑽を積み、努力し社会に大きく貢献してきました。

オートメカニック系列の目標は2つあります。1つ目は、自動車整備に関する知識、技術の修得そして向上です。毎年、「高校生ものづくりコンテスト自動車整備部門」に挑戦し、優勝まで今一歩のところにあります。2つ目は在籍中の3級自動車整備士の資格取得、さらにその上の2級自動車整備士資格取得のために上級学校進学への道筋をつけることです。

本校では、3級自動車整備士の資格取得のために3年次の10月と3月の2回にわたり受験が可能な教育課程となっています。今年は全受験生が全員合格することができました。また、開設当初から合格者が途切れることがなく、現在に至っています。

本校のオートメカニック系列は、「自動車整備のプロ」として社会に貢献できる人材育成のために、今日も学習に励んでいます。



野西高 チャレンジスクールへようこそ [7/30、8/2]

本校のチャレンジスクール(体験入学)が開催されました。2日間、延べ186名の中学生がAコースとBコースに分かれて体験を行いました。Aコースは主に授業や実習などを体験し、Bコースは部活動を体験するものでした。体験した中学生からは「部活動の雰囲気よかった」、「高校生が丁寧に教えてくれた」、「体験型でわかりやすい授業だった」などの感想が寄せられました。



大学 **短大** オンライン座談会～進路選択の参考に～

大学・短期大学部では、ビデオ会議システムを使った「オンライン座談会」を開催しています。今年度は7月と9月のオープンキャンパスが新型コロナウイルスの影響で中止になったことから、高校生の進路選択の参考にしてもらうことを目的として行っています。これまで、下北地区の高校生や青森県内の高校とオンラインでつなぎ、本学の在学生在が講師を務め、キャンパスライフや大学の講義の様子などについて質問に答えています。今後も高校や高校生個人の要望に応じて、機会を増やしていく予定です。



大学 東北女子サッカー選手権準優勝～青森県勢37年ぶりの準V～



今年度「ボールを常に持ち続け、主導権を握り、アクションを起こし続けるサッカー」をテーマに掲げ、スタートしましたが、未曾有の新型コロナウイルス感染症により活動の制限を余儀なくされました。自粛期間を経て活動を再開し、皇后杯、フットサル、全日本選手権での上位を目標に掲げ、今大会では、宮城県の強豪常盤木学園高等学校を破ることができました。決勝戦では、聖和学園高等学校に敗れてしまいましたが、ここまで選手が成長してくれ大変嬉しく思います。皆さま方におかれましては、応援していただき感謝申し上げます。また、5年連続でインカレ予選を突破しましたので、今回は上位進出を目指して頑張りたいと思います。

監督 畑中 孝太

大学 **短大** 令和2年度 女子アスリート健康相談 第1回集会・勉強会を開催 [7/21]

大学・短期大学部の強化指定部に所属する女子学生40名を対象に、「女子アスリート健康相談 第1回集会・勉強会」を開催しました。本年度に新設されたスポーツ局女子アスリート支援部門の紹介と、高橋看護学科長をはじめとする担当教員4名の自己紹介からスタート。5月に実施した健康問題に関するアンケート結果をもとに、学生のニーズが最も高かった「月経痛の対処方法」をテーマに健康講座を行いました。月経痛はなぜ起きるのか、どのような対処方法があるのかなどを学びました。



短大 園児たちとのリモート交流会 [6/30]



幼児保育学科の授業の一環で、市内の保育園と幼稚園の3園をインターネットで結び、リモート交流会を実施しました。この交流会では、ゆっくりと大きな声で話すことに加え、○や×などのからだ全体を使ったボディランゲージで表現したり、手書きのフリップを準備するなど、わかりやすいコミュニケーションを心掛けました。「だるまさんがころんだ」では、各園の子どもたちとWebカメラにタッチするまでを競うなど、リモートの特徴を生かした遊び方を考えました。初めは緊張気味だった学生も画面の向こうにいる園児の拍手や歓声に笑顔となりました。



八戸学院光星高等学校 櫛引八幡宮境内清掃ボランティア活動 [9/15、10/6]

地域貢献の一環として始まったこのボランティアも今年で3年目となり、工業技術科工業技術コース3年生と普通科総合学習コース1、2年生の48名が参加しました。

今年は、例年の秋季大祭の準備と境内美化の他に、大祭終了後の撤収作業も手伝い、櫛引八幡宮敬神会の方々と共に拝殿内や明治記念館の拭き掃除、ちょうちん下げや境内記念碑、案内板の拭き掃除を行いました。

神社を支えている方々が高齢化し、高いところへの取り付けなど高校生の協力は大変ありがたいと感謝の言葉を頂くと、生徒は「神社での奉仕活動は初めてだが、汚れがきれいになり達成感がある。」「秋風が心地よくきれいになると気持ちよくなる。運気が上昇した気分。」と笑顔で活動を終わっていました。

この様子は、職員室前に写真掲示されていますが、生徒たちの活動する姿に頂いた感謝状と共に誇らしさを感じています。



八戸学院光星高等学校 工業技術科 地域と生徒を繋ぐ町内掲示板

10年前に学区内の消防署の看板を制作したことがきっかけで町内会から町内掲示板の相談を受けました。そこで、工業技術科では生徒の実習の一環として引き受け、これまで制作した町内掲示板は7基になります。他にもベンチやゴミ箱を制作し、公民館やプールなどで使用されています。



【町内掲示板を通じて】

生徒は、町内掲示板制作を通じて多くのことを学びます。また、使用する人や場所に応じて高さや幅を変えたり、ホワイトボードにして文字を書けるようにしたり、マグネットを張れるようにするなど快適に使用していただけるよう生徒のアイデアが盛り込まれています。



〈全国を体験した高校時代〉

子供の頃から近くの凍った池で滑るなどスケートは身近な遊びの一つでした。小学校5年生の時にスケートクラブに入り、冬場はリンクに通う毎日でした。中学校でもスケートを続け、その後、光星高校スピードスケート部に入部。部員が少なく存続の危機もありましたが、OBからの支援もあり、インターハイや国体で入賞を果たすことができました。当時の中学校大会は県大会までしかなく、高校で初めて全国レベルの戦いを体験しました。光星高校での様々な体験がなければ今の自分は疎か、オリンピック出場もなかったと思います。

〈日の丸を背負って〉

高校卒業後、スピードスケートの名門専修大学に進学しました。当時のスピードスケート部には、サラエボオリンピックやカルガリーオリンピックに出場した黒岩 彰さんをはじめ、ナショナルチームに選抜される先輩も多くおり、日の丸を背負って戦う先輩を間近に見て、自分も同じ舞台で戦いたいと思うようになりました。大学3年生の時に短距離に種目変更をしてから成績が伸び、ナショナルチームに選抜、さらに世界大会でメダルを獲得し、世界での手応えを感じました。この頃からオリンピックをより強く意識するようになりまし



八戸地域広域市町村圏事務組合
消防本部 次長
金濱 康光 氏
光星学院高等学校
(現八戸学院光星高等学校)
普通科 昭和57年3月卒業

〈夢の舞台オリンピック〉

大学を卒業して2年後の昭和63年にカルガリーで開催された冬季オリンピックに念願の出場を果たします。オリンピックは、スポーツの祭典と言われるように、世界で唯一、様々な競技の選手が一同に集う大会です。アスリートが最終的にたどり着く地点であり、全てがこれまでの大会とは違う特別な空間でした。私は、オリンピックの舞台で自分が持っている力をどれだけ発揮できるかを第一に考えました。500mと1000mに出場し、メダルには手が届きませんでした。しかし、本番は緊張もなく集中でき、それまで培った全てのもを出すことができました。

〈地域に恩返しを〉

オリンピック出場を区切りに現役生活を終え、次のステップとして、これまで育てていただいた地域に恩返しをしたいという思いから消防士の道を選びました。私は、消火や救助など、現場の最前線で活動する救助隊を希望し、消防人生の半分を救助隊として過ごしました。現在は現場から離れ、消防本部に勤務。管轄している1市6町1村の消防署を統括し、地域にとってより良い体制の構築を目指しています。今後は、地域住民の安全を第一に考え行動できるような消防士の育成にも力を入れていきたいと思っています。



消防本部内にある金濱さんが設計に携わった訓練所
消防救助活動に不可欠な体力、精神力、技術力が養われます

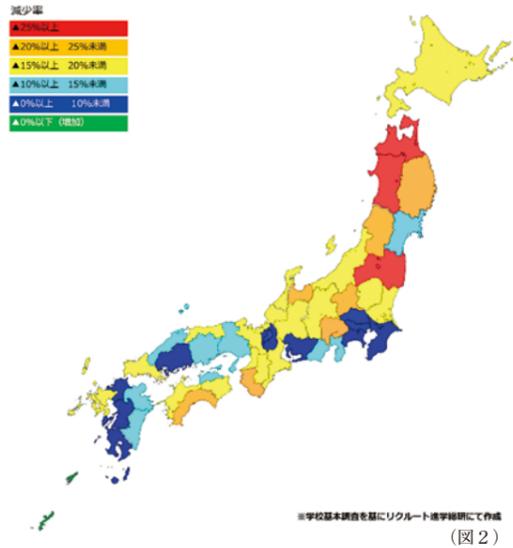
これからの本学院について

学校法人光星学院事務局長 岩浪 始由

これからの学校について

学校法人光星学院常務理事 古川 聡

18歳人口の予測 (全体：都道府県別：2019→2031年)



18歳人口予測 (全体：全国：2019～2031年)



(図1)

(図2)

まずは上の2つのグラフを見ていただきたい。リクルート進学総研が「2019年度学校基本調査(速報値)」から作成した、18歳人口の全国(図1)と都道府県別(図2)の将来予測です。

全国では2019年の117.5万人が2031年には103.3万人となり、14.2万人減少します。その中でも青森・秋田・福島は3県は25%以上、岩手・山形の2県についても20%以上、東北地方全体では22.7%の減少となっています。

特に青森県の減少率は東北地方でも最大で、2019年の18歳人口1万2452人が2031年には8868人となり、3584人減少(28.8%)すると予測されています。

少子高齢化が顕在化しています。青森県の18歳人口が2031年に3500人余り減少するということは、高校ではその3年前、幼稚園では既にその影響を顕著に受けていることを意味しています。本学院ではここ10数年の間に、大学の学部増、短大への看護学科設置と4大化、高校の入学定員適正化、幼稚園の新制度への移行などの改革を実行してきました。しかしながら、少子化にますます拍車がかかる今後の10年先を見据えると、まさに将来への生き残りかけた正念場を迎えています。

学院創設60周年を期に、法官理事長による「新立体的総合学園構

キャンパス八戸学院の編集担当から「これからの学校について」のテーマで寄稿依頼があり漠然と掴みどころがない大きなテーマですが、総合企画室長の観点から少し述べていただきます。

学校のこれからを語る時、避けて通れないのが人口減少という大きな社会問題です。

つい最近私達に身近なところで青森銀行とみちのく銀行の統合についてニュースが流れ、皆様も大きな関心を持ったことと思います。

人口減少が止まらない中では銀行だけでなく学校も同様です。既に幼児教育、初等教育、中等教育の現場では公立を中心に統廃合が全国的に始まっており、高等教育機関では近い将来本格的に統廃合の嵐が吹くことが予想されます。

このほかにも新型コロナウイルスの流行とともに人々の新たな生活スタイルが構築されつつあります。会社に出勤することなく在宅で仕事が完結し、学校ではキャンパスではなくリモートで講義が行われます。

通信技術のすさまじい進歩がこれからも世界的に進み5G、6Gと進む中で生活環境に及ぼす影響はどのようなもの

なるのか予測が付きません。

また、教育費の無償化が順次進んでいますが、このことは県や国に対して私学が一丸となって要望し取り組んできたことで、永年の夢が実現しつつあるのです。

しかし、学校経営が健全でなければ享受できない仕組みで、私学を救済する目的ではないのです。このことは私学間の競争激化はもちろん公立の学校や地域を超えた競争となるのは間違なく学校の淘汰を加速させるはずですが、どの教育機関を選ぶかは消費者つまり園児、生徒、学生であり、またその保護者の方々なのです。

これからの学校は、このような社会的環境の変化を十分に咀嚼し、競争に勝つための手段や準備を的確かつスピーディーに行うことが強く求められます。

八戸学院では令和3年度から新たに始まる第4次中期5ヶ年計画を新立体的学園構想に基づき、未来を創造するために立案中です。

しかし、さらに先を考えると全国2番目の勢いで人口減少が進む中、八戸では高等教育機関がどのような形態で存続可能なのか、それに附属する高校以下の教育機関はどのように継続可能なのかなど、銀行統合の話題のように不透明です。

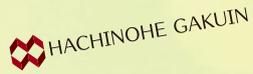


新型コロナウイルスの影響は少なからず地方に恩恵をもたらすかもしれない。都会への一極集中に警鐘が鳴らされ地方への分散が加速される可能性もあります。

いずれにせよ八戸学院が競争に打ち勝ち、どのような環境の変化に遭遇しようとも、地域教育の担い手としての存在感を保つため、自らを向上させる努力と自覚が全教職員に必要です。

想」のもと、①教育の質(力)の向上、②学院の特色強化とグループ連携、③地域連携による経営基盤強化と共生、④新時代の国際教育の研究と実践、という今後目指すべき4つの柱が示されました。新構想の制定から3年が経過しようとしている現在、本学院に所属する全ての教職員は今一度この4本柱について、「自分はこの目標の達成に貢献できているのか」を問い直してみる必要があると強く感じています。

学院教職員が一丸となってこの難局に挑まなければ、10年先の明るい展望は描けません。4つの柱のうち何か一つでも貢献できるアイデアはないかと、突き詰めて考えてみることも有効ではないでしょうか。例えば、高等教育機関については「少子高齢化」を逆手にとって、一線をリタイヤした年齢層や子育てを終えた主婦層などの社会人学生、地元自治体との連携による委託生などを受け入れる方策はないか、を考えると自分自身のここ数年の課題となっています。



八戸学院グッズ紹介



オープンキャンパスをはじめ、様々なイベントで配布され好評をいただいている八戸学院グッズに新たなグッズが仲間入りしました。



〈ミネラルウォーター〉

まろやかで、すっきりとした味わいのミネラルウォーター。各種イベントで配布され、持ち歩きにも丁度よい350mlです。



〈さば缶〉

「地元こだわったグッズ」をコンセプトに企画され、地元業者とのコラボレーションにより誕生。日本一脂の乗ったサバと評される地域ブランド「八戸前沖さば」を使用したこだわりの一品です。



〈ワイシャツ〉

ボタンが学院カラーでオシャレ（左）。左袖にロゴを刺繍しました。



〈ポロシャツ〉

バーガンディ、ネイビー、ブラックの3色を展開しています。